

金沢市の子育て支援に関する実態調査（4）

— かなざわ子育て夢ステーション事業 —

Investigation into the actual situation of child care support in Kanazawa (4)
— Kanazawa Kosodate Yume Station Project —

北川 節子
Setsuko kitagawa

〈要旨〉

金沢市の地域子育て支援拠点事業（センター型）である「かなざわ子育て夢ステーション事業」の利用について調査を行った。今回は利用者の属性、認知方法、事業に対する意見、自由記述について分析した。調査対象は事業を行っている保育所80園のうち26園の参加者215人、回収は131人（回収率60.9%）であった。利用者は「母親」96.2%、年齢は30歳代が73.5%、家族形態は「核家族」47.3%、「核家族・祖父母近居」38.9%であった。夢ステーション事業を認知した方法は「保育園の掲示物・パンフレット等」48.9%、「友人・ママ友からの紹介・口コミ」40.5%であり情報提供の不備が指摘された。事業に対する意見は「開催日の増加」「園独自のイベント」「開催園の増加」に賛成の意見が多く、「会員制」「有料」には反対の意見が多かった。自由記載にも情報提供の充実や開催方法に同様の傾向が見られた。事業内容の要望には「子どもの活動」「給食・おやつ体験」「在園児との交流」などがあり、母親のより積極的な子育てや情報収集の意欲がうかがえた。

〈キーワード〉

金沢市、保育所、地域子育て支援拠点事業、センター型

1 地域子育て支援事業

1-1 子育て支援政策の推移⁽¹⁾

少子化社会に対する取り組みは1995（平成6）年「エンゼルプラン」からはじまり、2003（平成15）年には「少子化社会対策基本法」が制定、それに基づいて2004（平成16）年には「子ども・子育て応援プラン」が閣議決定された。その後2007（平成19）年「『子どもと家族を応援する日本』重点戦略」、2010（平成22）年には「子ども・子育てビジョン」が策定され現在に至っている。当初は保育所の量的拡大や低年齢児保育、延長保育等の多様な保育サービスの充実等が重点的な政策であったが、現在は①子どもの育ちを支え、若者が安心して成長できる社会へ、②妊娠、出産、子育ての希望ができる社会へ、③多様なネットワークで子育て力のある地域社会へ、④男性も女性も仕事と生活が調和できる社会へ、と多様な政策を準備してめざすべき社会への模索を試みている。

一方2002（平成14）年には厚生労働省において「少子化対策プラスワン」がまとめられ、子育てをする家庭の視点からみてより均衡のとれた取り組みを行うこと、男性を含

めた働き方の見直し、地域における次世代支援、社会保障における次世代支援、子どもの社会性の向上や自立の促進など総合的な取り組みを行うこととされ、2003（平成15）年には「次世代育成支援対策推進法」が制定された。これに基づいて各地方自治体と事業主は次世代育成支援のための取り組みを促進するために、それぞれ行動計画を策定・実施することとなった。

1-2 地域子育て支援拠点事業

身近な場所に子育て親子が気軽に集まって相談や交流をするための「地域子育て支援拠点事業」⁽²⁾は2007（平成19）年から開始された。これは子ども・子育て支援策のうち「多様なネットワークで子育て力のある地域社会へ」に位置づけられ、「こんにちは赤ちゃん事業」「ファミリー・サポート・センターの普及促進」「一時預かり、幼稚園の預かり事業」等の「地域における子育て支援の拠点等の整備及び機能の充実を図る」の中に含まれる事業である。

地域子育て支援拠点は①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、②子育て等に関する相談・援助の実施、③地

域の子育て関連情報の提供、④子育て及び子育て支援に関する講習を基本事業としており、公共施設の空きスペースや商店街の空き店舗等において実施する「ひろば型」、保育所等において実施する「センター型」、民営児童館において実施する「児童館型」に分類されて、それぞれの特色を生かした取り組みを行っている。2009（平成21）年には全国で「ひろば型」1527か所、「センター型」3477か所、「児童館型」195か所が設置されている。

2 かなざわ子育て夢ステーション事業

2005（平成17）年次世代育成支援対策推進法に定める市町村行動計画が各自治体で策定されることになった。金沢市でも「金沢市少子化対策推進行動計画」が策定、「金沢子育て夢プラン2005」となり2005（平成17）年度から2010（平成21）年度までの5年間計画として実施される運びとなった。これ以降、金沢市では「近江町交流プラザちびっこ広場、玉川図書館の開設」「かなざわ子育て夢ステーションの開始、拡充」「医療費償還払制度の実施」「子育てサービス券の支給、該当サービスの拡充」「赤ちゃん全戸訪問事業の実施」「児童相談所、一時保護所の開設」など、様々な取組が行われた。

「かなざわ子育て夢ステーション事業（以下、夢ステーション）」³⁾は「保育所・幼稚園・児童館を身近な子育て支援の拠点として、地域の妊産婦や乳幼児を持つ保護者が、気軽に育児の相談や育児講座の参加、友達づくりなどをおこなえる」場として紹介され「ベビーカーを押して行けるところ」「おおよそ小学校区に1～2か所ずつ設置」される予定で計画された。この事業は「地域子育て支援拠点事業」のうち「センター型」事業に当たる。

事業内容は「基本事業（必須）」として①子育て相談、②子育て支援情報の提供、③親子ふれあい教室を月1～3回実施、「各施設選択事業」として①小中高生との乳幼児ふれあい体験教室、②未就園児と父親との育児と遊びの教室、③地域の高齢者との伝承遊び等、④専門家を交えた育児講座、⑤食育事業、⑥妊産婦教室のうち基本的には2事業を選択し実施することとなった。

2005（平成17）年度は市立保育所13園のうち12園、県立・私立保育所99園のうち30園、計42園（実施率37.5%）の取り組みに過ぎなかったが、年々その数は多くなり、2009（平成21）年度は市立12園、県立・私立69園、計81園（実施率72.3%）まで拡大した。

2010（平成22）年度は事業内容が変更された。基本事業は「地域子育て支援事業」として地域の親子参加型プログラムまたは子育て家庭の交流の場を通じた相談・援助の実施、選択事業として「保育所からはじまる子育て人材育成事業」として各保育所の企画提案の中から採択することに

なり、年間1事業のみとなった。2010（平成22）年度の夢ステーション実施施設数は、保育所80園（実施率71.4%）であり、その他、幼稚園29園（76.3%）、地区児童館30園（100%）となっている。

3 研究動機

筆者は継続的に地域保育所の夢ステーションと近江町交流プラザちびっこ広場の活動に参加している。その場で利用者の方々から、「いくつかの保育所の夢ステーションを利用している」「1週間のうち夢ステーションに出かける日と子ども広場に出かける日を計画して、子どもと2人だけにならないようにしている」等の意見を聞いた。実際に近隣の保育所では同じ顔ぶれをみることもあり、中には地域的に離れた地区からも利用される方がいる。

そこで開始されてから5年が経過した金沢市独自の事業である夢ステーションについて、利用者はどのような利用の仕方をしているのか、要望は何か、広場型事業との違いは何かなどその実態を探り、意義について整理するの必要を感じた。

この調査結果は行政に役立てていただくための資料として金沢市健康福祉局こども福祉課に提供することにした。今回は調査の一部について報告する。

4 研究方法

4-1 目的

金沢市内の未就園児をもつ保護者の、かなざわ子育て夢ステーション事業およびこども広場事業の利用実態を知り、金沢市の子育て支援事業について具体的な提案を行うことを目的とする。

4-2 調査対象者・方法

「保育所で行われているかなざわ子育て夢ステーション事業を利用している保護者」

平成22年度は市内保育所112園中、夢ステーションを展開している保育所は80園であった。このうち研究者が夢ステーションを訪れ直接調査を依頼することができる利用者、および保育所の好意により保育所関係者から配布できる利用者を調査対象とした。なお、夢ステーションの訪問は、研究者が保育所と日程調整を行い了解が得られた場合に実施した。また金沢市は保育所を中央、北部・北部近郊、東部、南部・南部近郊、駅西・臨海、西部の6区域に分けているので、地域がもれなく入るように配慮した。その結果、26カ所の保育所29事業について調査を実施することができた。配布数は215であった。回収は直接、研究者あてに郵送とした。調査用紙は先行研究を参考に自作とした。

表1 調査数

地区	調査保育所数	調査事業数	配布数
中央	1	1	2
北部・北部近郊	5	6	43
東部	4	4	21
南部・南部近郊	6	6	43
駅西・臨海	8	10	92
西部	2	2	14
計	26	29	215

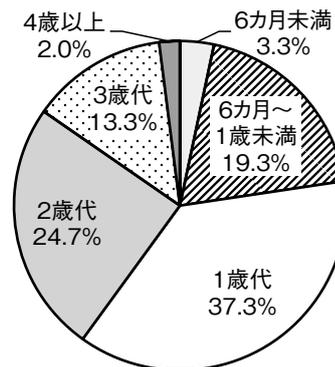


図2 子どもの月齢・年齢

4-3 調査時期

平成22年8月2日～9月27日

4-4 回収

配布数215に対して回収数は131（回収率60.9%）であった。なお、すべてを有効回答とした。

5 調査結果

5-1 利用者の属性

夢ステーションに参加した利用者は「母」126人（96.2%）、「父」「祖母」がともに3人（2.3%）であった。夫婦で参加している人もいたので、人数の計は回収数より多くなった。

年齢は「30～34歳」が54人（40.9%）と最も多く、次いで「35～39歳」43人（32.6%）、「25～29歳」24人（18.2%）となった。「20歳未満」の参加者はいなかった。

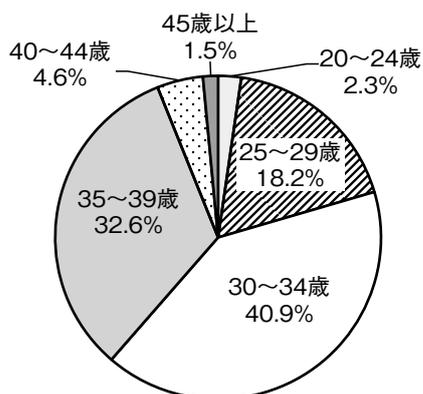


図1 利用者の年齢

夢ステーションに連れてきた子どもの数は「1人」が111名（84.7%）と最も多く、次いで「2人」19人（14.5%）であった。

連れてきた子の月齢・年齢は、「1歳代」56人（37.3%）、「2歳代」37人（24.7%）「6カ月～1歳半」29人（19.3%）であった。

夢ステーションに参加した人の家族の同居・近居については、「父母同居」128人（97.7%）、「祖母近居」55人（42.0%）、「祖父近居」「兄弟姉妹」がともに50人（38.2%）であった。祖父・祖母同居は10%前後にとどまった。回答者には「1人親家庭」の人はいなかった。

さらに家族の同居・近居の状況から家族形態を「1人親家庭」「核家族」「三世代家族」「核家族・祖父母近居」「三世代家族・祖父母近居」「その他」に分類し集計した。

その結果、もっとも多いのは「核家族」62人（47.3%）、ついで「核家族・祖父母近居」51人（38.9%）であった。

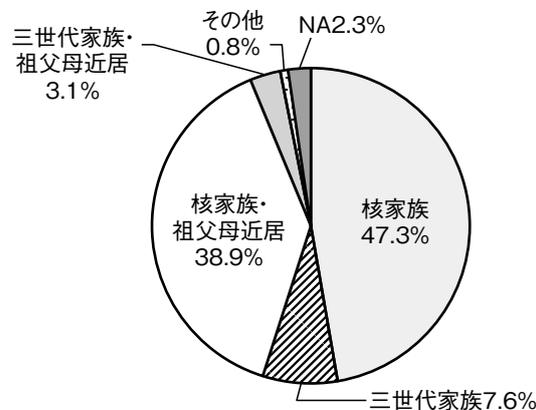


図3 家族形態

現在の住居の居住年数は「2～3年」59人（45.0%）、「4年以上」58人（44.3%）であった。

居住年数3年以下の人の出身地は、「金沢市内」28人（38.4%）、「石川県外」26人（35.6%）、「石川県内」19人（26%）であった。

5-2 認知方法

今日の夢ステーションの認知方法は「保育園の掲示物、パンフレット、職員から」64人（48.9%）、「友人・ママ友からの紹介・口コミ」53人（40.5%）であった。

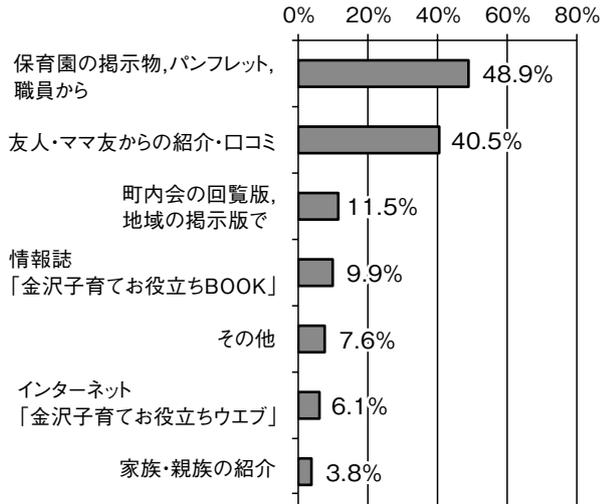


図4 事業の認知方法

5-3 事業に対する意見

夢ステーションに対する意見のうち「はい」の多い項目は、「開催日数の増加」85人（64.9%）「園独自のイベント」64人（48.9%）「開催園の増加」62人（47.3%）であり、「いいえ」の多い項目は、「会員制」102人（77.9%）「有料」89人（67.9%）「午後の開催」54人（41.2%）であった。「母親同士の会話時間」は「どちらでもない」77人（58.8%）と多いことが特徴的であった。

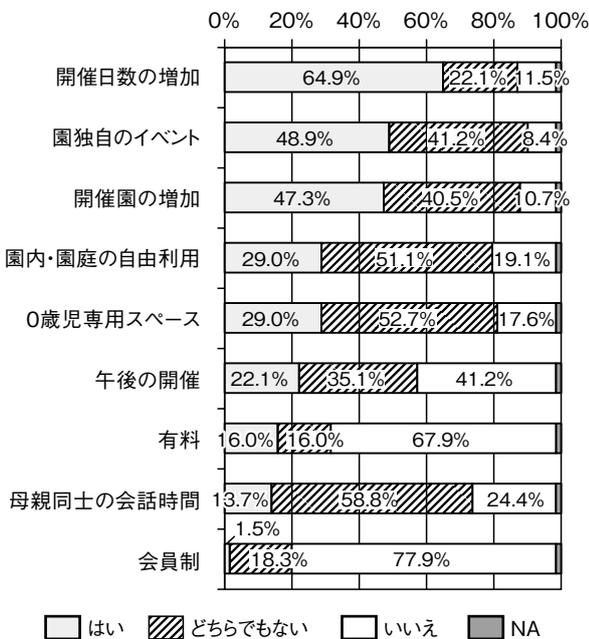


図5 事業に対する意見

5-4 自由記載

自由記載について分類した結果,表2のとおりとなった。夢ステーションに対しては「助かる」「感謝している」「楽

しみ」「有意義な時間である」「気軽に参加できる」などの肯定的意見が多くみられた。この事業は保護者にとっても有意義で,将来の入園する園選択の機会ともしていることが分かる。

しかし情報については「一度に確認できるようにしてほしい」「わかりやすく伝えてほしい」「アピールしてほしい」などの積極的な宣伝を求める要望があった。またホームページの更新などインターネットを利用したの宣伝や,「出生届や健診時に日程一覧がほしい」「ショッピングセンターの授乳室に園のスケジュールがあるとよい」などインターネット以外の方法での周知を求める意見もあった。

表2 自由記載分類

分類	数
1 夢ステーション事業はよい	
1) 夢ステーション事業は助かる・有意義	18
2) 保護者にとって有意義	4
3) 入園する園を選択する機会	3
2 情報提供	
1) 情報をもっと提供してほしい	12
2) インターネットの充実	7
3) インターネット以外の様々な方法で周知	4
3 開催方法	
1) 回数を増やす	7
2) 時間	1
3) 曜日をずらす	5
4) 開催日を増やす	3
5) 季節・頻度	2
4 事業内容の要望	
1) 子どもの活動	9
2) 給食・おやつ体験	3
3) 在園児との交流	3
4) 講習	3
5) 自由参加	1
6) 母親の年齢別事業	1
7) その他	2
5 保育士からの支援	3
6 環境	10
7 一時保育	4
8 その他	1

また回数の増加,時間の延長,曜日の調整,開催園の増加など拡充を求める意見もみられた。事業内容についてはイベントを中心とした様々な子どもの活動や,給食・おやつ体験,在園児との交流,講習などの意見があった。

初めて参加する時に保育士からケアをしてほしいとの意

見があり、事業者側にとって配慮すべき内容のように感じられた。

6 考察

6-1 利用者の特徴

夢ステーション事業利用者はほとんどが母親（95.4%）であった。年齢は20歳代後半が18.2%であり、ほとんどが30歳代（30歳代前半40.9%、30歳代後半32.6%）であった。連れてきた子は1歳代（37.3%）又は2歳代（24.7%）であり、多くが1人（84.7%）であった。

家族形態は「核家族」（47.3%）、「祖父母が近居する核家族」（38.9%）が大半であり、合わせて86.2%であった。反対に「三世代家族」と「祖父母が近居する三世代家族」は合わせて10.7%であり少ないことが分かった。また現在の住居にすんで3年以内が55.7%（1年以内10.7%、2～3年45%）であり、これらの人のうち、金沢市以外の出身者が61.6%を占めた。つまり、夢ステーション事業に参加している人の34.4%は現在の住居に住んで3年以内、出身地が金沢市以外の人であることが分かった。

北川の2008年度調査⁽⁴⁾では、金沢市内の0、1歳児をもつ母親の家族形態は「配偶者、子どもと自分」「配偶者、子どもと自分、配偶者の親が近居」「配偶者、子どもと自分、自分の親が近居」を足し合わせた割合は82.9%であり、今回の調査と同様の値であった。また金沢市に居住して3年以内で出身地が金沢市以外の人全体の34.3%であり、これもほぼ同様の値を示していることが分かった。

これらの結果から、夢ステーション事業利用者の8割以上は1人で子育てをしている核家族であり、さらに1/3は金沢市以外の出身者で市内に住み始めて3年以内の人たちであることが明らかになった。その特性を踏まえた支援が必要と考えられる。たとえば、初めて参加される方の居住年数、出身地などをお聞きし、積極的に金沢市の子育て情報を提供するなどがあげられる。

6-2 認知方法

夢ステーション事業の認知方法は「保育園の掲示物、パンフレット、職員から」48.9%、「友人・ママ友からの紹介・口コミ」40.5%であり、金沢市からの情報提供によるものは少なかった。2009（平成21）年度は各保育所で行われている夢ステーション事業が金沢市ホームページに載せられていたが、2010年度はそれが継続されなかったため、このような結果になったと思われる。自由記述にも「情報をもっと提供してほしい」との意見が多く寄せられていた。また「インターネットの充実」では「随時新しい情報を載せてほしい」「金沢子育てお役立ちウェブの認知度を上げてほしい」との意見が寄せられ、「インターネット以外の様々

な方法で周知」では、「3ヶ月健診時に各保育所の開放日の一覧を提供」「ショッピングセンターの授乳室に各園の事業スケジュールを置く」「地域の回覧板、スーパー、掲示版などの案内」など具体的な方法が提示されていた。

今年度の夢ステーション事業の情報については発信不足であることは否めない。ホームページの管理は当然のこと、インターネットに頼らず、様々な方法で地域の人々の力を借りながら、情報を発信していくことが必要と考えられる。

6-3 事業に対する意見

事業に対する意見は「開催日の増加」64.9%、「園独自のイベント」48.9%、「開催園の増加」48.9%が多くなった。また自由記述には回数の増加、開催する園の増加に関する意見が多く寄せられている。曜日については「曜日が重なると行けないのでずらしてほしい」「各園が連携を取り合って、日時を決めてほしい」との意見があった。地区ごとに各園が連絡を取り合って、開催日を決め利用者の便宜を図ることも必要でないかと思われた。現在、夢ステーション事業に関する打ち合わせ会議等は行われていないが、地域ごとに利用者の便を図るための連絡等は行うことが必要ではないかと思われた。

有料化については「いいえ」67.9%、会員制については同じく77.9%であり、現在多くの保育所で行われているように、事前申し込みをしなくても自由に参加でき、無料であることが利用のしやすさにつながっているようであった。

今回、調査した保育所での夢ステーションの事業内容は、「プール遊び・水遊び」10か所、「制作活動（小麦粉粘土・はじき絵）」2か所、「遊び（的あて・シャボン玉）」2か所、「訪問人形劇」1か所、「運動遊び」3か所、「園庭遊び」2か所、「室内遊び」・「親子ふれあい教室」各2か所等であった。今回は調査時期が夏であったのでプール遊びが多くなったが、各保育所では工夫を凝らして年間を通じて様々な遊びやイベントを提供しているように思っていた。しかし「園独自のイベント」を希望する意見が48.9%であり、自由記述にも「0～1歳児クラスでも歌や簡単なお遊戯（体操）があるとうれしい」「読み聞かせや同じ遊びをするイベント」「自然に触れ合う（芋ほりなど）イベント」など子どもとの活動の幅を広げたいという意見があった。これらから今より一層、親子が一緒に楽しめる手遊びや運動遊び、歌などをイベントとして提供することが必要ではないかと考えられた。

また「給食を一緒に食べる経験」「在園児との交流」など同じ年齢の子どもたちの様子や保育の方法が分かる経験を希望するという意見もあった。これは特に初めての子の場合、どのように保育してよいかわからないため、実際の

保育の現場を見学したい、同じ月齢・年齢の子どもの様子を見たいという希望の表れであろうと思われた。祖父母が近居していても核家族には変わりはない。純粋な核家族を含めると86.2%の母親が1人で子育てをしている現状を考えると、保育所において子どもの様子や保育の方法について見学・指導の機会を作ることは重要ではないかと考えられた。

自由記述には「参加しやすい雰囲気づくりをしてほしい」「初めての参加の時には施設の使い方を説明してほしい」「初めての参加の時には疎外感を感じるのでフォローしてほしい」などの保育士にもっときめ細かく配慮してほしいとの意見もあり今後の検討事項に思われた。

7 まとめ

今回、調査結果の一部を紹介することができた。今後は学会発表等を通して広く説明していくつもりである。

また、この結果は前に述べたように金沢市に提供するが、その他に調査に協力をしていただいた保育所にも提供する予定である。この結果が今後の事業に役立てていただければ幸いである。

最後に調査に協力をしていただいた保育所の関係者に深く感謝をいたします。

注

- (1) 詳細は平成22年版子ども・子育て白書（内閣府）p 50～54を参照のこと、少子化対策はこれ以外に1999（平成11）年「新エンゼルプラン」、2006（平成18）年「新しい少子化対策について」、2008（平成20）年「新待機児童ゼロ作戦について」などがある。
- (2) 内閣府『子ども・子育て白書（平成22年版）』平成22年7月 p 117～118
- (3) 子育て向上委員会『B-NO のびのびビ～ノ』金沢市健康福祉局こども福祉課平成22年10月
- (4) 北川節子『金沢市の子育て支援に関する実態調査（2）— 1, 0歳児をもつ母親の属性及び情報収集と支援の利用 —』金沢星稜大学人間科学研究第3巻第1号2009年9月

参考文献

- 金沢市福祉健康局こども福祉課『金沢市少子化対策行動計画かなざわ子育て夢プラン2010』平成22年3月
保育小六法編集委員会『保育小六法（平成22年版）』中央法規 平成21年12月